

不思議なぬいぐるみ

作:葛(kazura)

プロローグ

夢を叶えたい。幸せになりたい。

そんな願いが強く、誠実で真実であったとき、あなたの傍に夢職人は現れます。

これからお話しする物語は、夢職人と出会った人々のおはなしです。

あるところにひとりの女の子がいました。女の子の名前を、サリヤといいます。サリヤの家族は多くの兄弟がいました。サリヤの下にはまだ歩けない兄弟がたくさんいます。上の兄弟もいましたが、みな、働きにでていました。みんなで働いても、食べ物は幼い兄弟たちへたべさせるためであることはわかってはいたものの、おなかいっぱい食べれることはありませんでした。サリヤは、背丈は低く、けれど、小学校の高学年にあがるかあがらないかの成長をしていました。サリヤは、毎日、小さな兄弟たちのために毎日、靴磨きをしたり、掃除をしたり、と小さなことはなんでもやっていました。

ある日のことでした。お母さんが、病気になり、寝込んでしまいました。兄弟たちは、お母さんのために、さらに一生懸命に働きました。サリヤもがんばりました。けれども、いつもおなかは空腹感ばかりでしたが、お母さんや幼い兄弟たちのため、とがまんをしました。お母さんの治療のための薬代や、お医者様への支払い代はとても高く、今まで以上に働かなければなりません。サリヤはひとり町に朝早くでかけ、夕暮れ時に帰宅できたのが、いまではすっかり夜になってから町を出ていました。

帰り道のことでした。風はだんたん冷たくなり、冬が近づいてくるのがわかります。サリヤは、オレンジ色の空を見上げ、ふと思いました。

お母さんが治ったら、みんなで、おなかいっぱいになるまで、パンやお肉を食べたいな。

この願いは遠い願いだとはわかっていました。夕暮れの町のとおりには、おいしそうな食べ物のおいがあちらこちらから流れてくるので、たまらない気持ちにさせられました。こうして毎日そんな思い続けました。

そんなある日のことでした。いつもの帰り道ではみかけないお店が一軒、たっているのを見つけました。そこは、白い屋根の白い壁で覆われた小さな建物でした。サリヤはとても気に入りしました。そこで、その白い建物を見に行くことにしました。まばゆい白い色の建物は、とても目立ちます。

どうしていままで気づかなかったのかしら。
と、サリヤは思いました。

近づいてみると、窓がドアを挟むようにあり、窓辺には、たくさんのぬいぐるみが飾られていました。小さなウサギや、猫、犬、くま、小鳥などたくさんの動物のぬいぐるみがあります。サリヤは食い入るように見入りました。なぜなら、サリヤにとって、ぬいぐるみは生まれて初めてみるものだったからです。

ぬいぐるみの片手には、小さな紙が一枚ついていました。サリヤはその紙切れをみました。紙には、見たことのない数字の桁が並べられていました。それをみてサリヤはため息をつきました。

わたしにはこれを買うお金はないわ....。
でも。見るだけでもいいわよね。

サリヤは自分を励まし、見るだけでも幸せでした。どれくらいの時間がたったのでしょうか。気づけばあたりはすっかり暗くなり、空は暗闇の夜空に変わっていました。

早く帰らなきゃ。

サリヤははっと気づき、うちへ帰りました。

翌日のことです。あの白い建物がまだあるかどうか、わくわくしながら町へ向かうと、やはりその建物はありました。サリヤはそっと窓に近寄ると、昨日

と同じ動物たちのぬいぐるみを見つけました。にこりと微笑むと、仕事探しのために町へいくことにしました。

その帰り道。白い建物はまだありました。昨日と同じように窓に近づくと、ぬいぐるみたちが窓の中にいました。じっと見ていると、窓の中の茶色のくまのぬいぐるみが、一瞬だけ、手を振ったようようでした。サリヤはあわてて目をこすりました。

そしてもう一度目を見開いてみると、また手を振りました。サリヤは思わずのけぞりました。そして周りをきょろきょろとすると、誰も自分の様子を見ていなかったことを確認しました。おそろおそろ窓に近づくと、茶色のくまのぬいぐるみは、ゆさゆさと体を揺らせて、窓に近づいてきました。サリヤはごくりとつばを飲み込みました。茶色のくまのぬいぐるみは、サリヤに向かって、手招きをするように、ゆっくりと腕を振りました。

わたしに、お店の中には行ってってこと...?

サリヤはドアを見つめ、そして、自分の今の身なりを上から下までながめました。髪はくしを通さずに、ぼさぼさで、洗濯をしばらくしていない洋服とはいえないは織物に、靴をはいていない足。鼻を洋服に近づけると、なんともいえないにおいがしました。サリヤはため息をつく、首を横にふり、それはできないわ、と小さな声でくまに向かって話しかけました。茶色のくまは、それでも手招きをします。こんな格好じゃ、無理、とサリヤはつぶやきました。すると、

入っておいでよ。

甲高い小さな声でしたが、はっきりと耳で聞き取りました。サリエはきょろきょろ見渡し、誰もいないことを確認しました。まさか...。窓をみると、くまのぬいぐるみが手を振り続けています。

まさか、あなたなの?

サリエはつぶやきました。くまのぬいぐるみは手を振り続けています。わたし、お店の方に迷惑かけるから入れないわ。サリエは力なく答えました。

大丈夫。心配しないで。

それでも甲高い声はやさしく答えました。すると、閉まっていたドアが、ぎいっと音を立てて、開きました。

サリエはおそろおそろ開いたドアに手をかけました。そして、そっとお店を覗き込むと、いい香りがしてきました。今までかいたことのない、やわらかい香りです。

誘われるように、サリエはお店の中に入りました。お店にはたくさんのぬいぐるみが飾られていました。みわたすかぎり、ぬいぐるみです。圧倒されて、ぼんやりしていると、先ほどの茶色のくまが、足元に近寄りました。

こっちにおいで。

小さな声が聞こえてきました。そしてくまのぬいぐるみは、スキップするように歩き始めました。サリエはあわてて追いかけてきました。サリエとくまのぬいぐるみはお店の奥のほうへすすんでいきました。そこは、豆電球ほどの明かりがともされている、部屋でした。暗いのでサリエにはあまり部屋の様子がみられませんでした。くまのぬいぐるみは、足元にたちました。

君にいいものをあげる。

いいもの?

サリエは言いました。

目をつぶって。

いわれるがままに目をつぶりました。

両手を差し出して。

サリエは両手を差し出しました。すると、手のひらに、何かが置かれました。

目をあけていいよ。

サリエは目を開き、手のひらにあるものをみました。

これは...なに?

あけようとする、くまの音が聞こえてきました。

待って。まだあけないで。君がこの建物から出てから、あけて。

サリエはぐっと我慢しました。

きっとこれで君は幸せになるよ。

くまは言いました。

それって本当?

本当さ。君が強く願えば、必ず願いはかなう。君の願いが、素直なものであるなら、もっと願いはかなうよ。

くまは言いました。

さあ。もう時間だよ。君は帰らなくてはいけない。それをもって早くお母さんにあうんだよ。

なぜ、わたしのお母さんを知っているの?

くまは何もいいませんでした。

急ごう。目をつぶって。

サリエは、目をつぶりました。
数えていち、に、さん、で目を開けてね。
いくよ。いち、に、さん....。

サリエは目を開けました。

すると、いつの間にかお店の外にでていて、家の近くに寝ていました。どうやって出てきたのかわからないまま、ぼんやりしていると、兄弟たちが仕事から帰ってきて、サリエを見つけました。兄弟たちと一緒に家にもどると、兄弟の一人が、声をかけました。

おねえちゃん。その紙袋はなに?

指を指されたところをみると、洋服の間にはさんである紙袋を見つけました。

あ、これは...

サリエは、そっと中をあけてみました。

寄り添ってきた、兄弟たちも一斉にみます。年上の兄弟のひとりが、いいました。

それは、薬じゃないかな。

お母さんが大事に飲んでる薬を見比べるとそっくりなものでした。

それから、兄弟みんなでその薬をお母さんにあげ、見事にお母さんは回復しました。そして、紙袋の中には、金貨が数枚はっていました。兄弟たちは、その金貨で、新しいうちをたて、洋服を買い、そして食べ物もたくさん買えるようになりました。

後日のことでした。サリエはあの白い建物にお礼をしにいきました。しかし、どこを探してもあの、ぬいぐるみのお店は見つかりませんでした。サリエは、空を見上げ、ありがとう、と心の中で呟きました。

おわり

All Copy Rights reserved to Kazura-an since 2006